

Jellyfishes are the tropical rain forest of the sea.  
Biological diversity.  
Coexistence.  
Jellyfishes.

They are called as the tropical rain forest of the sea.  
They sometimes provide the habitat for the species in the ocean, and assist the circulation of the ocean.  
The Jellyfishes are the blessing of the ocean.  
We tend to think Jellyfishes are just floating around the ocean, but they support the part of the ecosystem as well.  
The benefits Jellyfishes provide the support to our lives in return.  
What can we return to them?



## クラゲは海のレインフォレスト | 杉岡 巳嘉

クラゲは海の熱帯雨林といわれています。彼らはエビ等の海の生き物の住処となったり、海の循環の補助をしたりと海の恵みとなっています。彼らは海にフワフワと漂っているだけのようですが、自然と共存し、しっかりと生態系を支えています。私たちは自然に何を返していけるでしょうか。



# 共立がいま進めている、 環境学習への取り組み

近年、日本では“環境”問題が改めて注目されています。

共立女子大学・共立女子短期大学では、環境問題の諸相をテーマにした授業をはじめ、自然科学系、人文・社会系、実学・スキル系などのさまざまな学びを組み込んだ、すそ野が広い、特色のある環境学習を行っています。

本学の環境に関する授業・取り組みの一部をご紹介します。

## Message | 学長メッセージ



共立女子大学・共立女子短期大学  
学長 入江 和生

近年、世界中で大きな自然災害が頻発しています。自然が人間の手に負えないものになってきているという印象があります。でも、もともと、人間こそ自然にとって手に負えないものであり続けてきたのです。

人間も自然界の一員ですが、ややもするとその自覚が薄れてしまうところに問題があります。環境問題とは、つまるところ、いかにして人間を自然界の一員としての定位置につけるか、ということなのでしょう。

本学は以前から環境問題にかかわる授業が多く、本学学生は「自然に」環境問題についての見識を深めています。これからは、それをもう少し意識的に行いたいと考えています。

環境教育は、深い意味での人間教育なのです。

## Project | 本学の取り組み

### グリーンカーテン プロジェクト

家政学部 児童学科 加藤 百合絵

グリーンカーテンプロジェクトは校舎に植物を茂らせることによる温暖化の抑制、校舎の美化を目指すとともに、夏の節電対策として企画されました。計画・実行ともに学生を中心に活動が行われ、2号館中庭にヘチマのグリーンカーテンを作ることに成功しました。植えられたヘチマは立派につるを伸ばし教室の厳しい暑さをしのいでくれたほか、学生・教員からも「キャンパスが綺麗になったね」など好意的な評価をいただくことができました。今回は初めての試みということもあり、いろいろ手探りで大変なこともありましたが、この成果を次回以降に活かしていきたいと思えます。





## 2011年度「共立アカデミーエコツアー」レポート

共立女子大学・共立女子短期大学は、共立アカデミーを通して、学生をはじめ卒業生や一般の方々にまで、広く学びの場を提供しています。2011年度からは特別企画として、さまざまな場所に赴いて、実体験から環境について学べるエコツアーを開催し、ご高評をいただいております。

昨年は、横浜市が運営する風力発電所『ハマウイング見学ツアー』、NPO法人「あそんで学ぶ環境と科学倶楽部」が主催する東京の川をエレクトリックボートで巡る『都心の水辺でエコツアー』の2つを開催しました。ここでは、それぞれのツアーレポートをご紹介します。

### Report 01

#### 今話題の風力発電所見学ツアー 風力発電所 ハマウイングを見に行こう！

(2011年9月14日実施)

昨年度より共立アカデミー講座に環境学習ツアーを新設しました。最初の企画として、横浜市が運営する風力発電機ハマウイングの見学に行きました。夏休み期間に、在学生だけでなく社会人受講者の参加を得て、学園のスクールバスで瑞穂ふ頭にある同施設を訪れました。

ハマウイングは、横浜市の繁華街がある関内・みなとみらい地区からよく見える埋立地に立地しています。大型ウィンド・タービンを、目立つ場所に立てることで、エネルギーに関する啓発・環境学習を目的とした横浜市の事業です。

現地へ行くバスの車内において、国際学部細野教授より、世界と我が国の風力発電の現状および当面の課題を予備知識として説明してもらいました。

現地では、市役所担当部局の方からの施設の概要をご説明いただき、次いでウィンド・タービンの内部を見学しました。導入の経緯、運転上のディテールなどを含め、現地に赴かないと聞けないお話をうかがうことができました。インターネットで情報が手軽に手に入る時代だからこそ、現地に行ってみて自分の目と耳で確かめる学びが、今までになく重要になっているものと考えます。



ウィンド・タービンの中に入る参加者

### Report 02

#### 東京の川を巡るエコツアー 都心の水辺でエコツアー ~神田川・日本橋川コース~

(2011年10月19日実施)

このツアーは、NPO法人「あそんで学ぶ環境と科学倶楽部」による『都心の水辺でエコツアー』の3つのコースの1つです。水道橋から定員10名のエレクトリックボートに乗り、約2時間で神田川・日本橋川をめぐりました。

最初に神田川・日本橋川の水質改善について学びました。喫水が低い小型ボートなので、メスシリンダーで水を採取して、参加者の目で水質を体感することができます。そして近年の水質改善が、民間の浄化活動の賜物であることを知りました。また、水質浄化に向けて私たちができることについての説明もありました。

このツアーのもう一つの醍醐味は、水質にとどまらず東京という都市のあり方を問いかけてくれることです。東京の下町は埋立地であり、運河網の水運により発展してきました。ところが、戦後になって水辺における江戸時代からの歴史的遺産が、護岸工事や都市開発で、あまりに安易に失われ、また、防災上の問題への認識も足りないことがあげられるとのことでした。

広い視野で東京の環境を考える契機となるとともに、官庁や営利企業に真似できない活動を行う優良NPO法人の存在意義を実感させてくれました。



採取した日本橋川の水

ツアーのエレクトリックボートに乗り込む参加者



家政学部  
建築・デザイン学科  
**林田 廣伸 教授**

1976年多摩美術大学大学院美術研究科修了。  
外資広告代理店のアートディレクターとして21年間勤務。  
毎日広告デザイン賞、ニューヨークフィルムフェスティバル  
銅賞、ACC賞などの各種広告賞を受賞。日本デザイン学会、  
日本広告学会所属。現在も忙しい合間をぬって公益性のある  
事業やNPOのポスター、マークなどの制作を行っている。

主な担当科目  
グラフィック・デザイン演習、CG演習、デザイン概論 ほか



CIと共立女子大学 林田ゼミ協働展示・発表会

これまでに、地球環境パートナーシッププラザ(環境省と国際  
連合大学の協働事業として設立)、東京・銀座ソニービル、ト  
ウキョウマリニチドウギャラリー、世界銀行情報センター、  
JICA地球ひろば、丸の内・住友信託銀行、スターバックスコー  
ヒー・ジャパン銀座マロニエ通り店、三菱地所丸の内さえずり  
館等で展示と発表会を行っている。

## グラフィック・デザインの手法を使うことによって、 より環境問題を理解していく

**Education policy** 生活者の目線で「環境」を考え、メッセージを発信すること

家政学部は人間がいかに生きていくかを探る  
場であり、そのために必要な知識や技術を学生  
が習得できるよう、私たち教員は道筋を立ててい  
かなければならないと思っています。私はグラ  
フィック・デザインという手法を通して、もの創  
りの目的を学生たちに理解させ、どのようなもの  
を創り、どうメッセージしていくべきなのかを体  
感させる責任があると感じています。

毎年、国際環境NGOのコンサベーション・イ  
ンターナショナル・ジャパン(以下「CI」と)協働

でポスターの制作と発表を行っています。環境  
問題の難しさは、ほとんどの人が環境問題には気  
づいているけれども、行動を起こしづらいこと  
です。「今、私たちになにができるのか。」共立女子  
大学の学生の素朴な等身大の視点でポスターを  
制作していくことで、展示作品を見てくださる皆  
さんとともに環境問題のキャッチボールができる  
のではないかと考えています。家政学部で学ぶ  
環境とデザインには、そういった大きな目的と使  
命があると考えています。

**Main class** 広告制作のメソッドを活用して、公益性のあるテーマに取り組む

2003年から、地球温暖化や、水と衛生など、環  
境をテーマにしたグラフィック・デザインの取り  
組みをゼミで続けています。2005年から現在ま  
で生物多様性をテーマにCIと協働展示と発表を  
行っています。

テーマからどのようにしてアイデアを導き出  
すか。それはキーメッセージとキービジュアルを  
しっかり構築することです。そしてそれを表現す  
るデザインの技術が必要です。勿論、これがなか

なか難しいのですが、これらを導き出す広告制作  
のメソッドを用意して、学生に理解させ、それら  
を活用することにより、単なる感覚ではない作品  
ができると信じています。作品制作のプロセスは  
彼女たちの環境意識を向上させます。この大学  
を卒業して、社会に出ていった時、また家庭をも  
つた時にも、環境に対する気持ちが続く行動につ  
ながっていくことを、私はいつもイメージして授  
業に取り組んでいます。



国際学部  
国際学科  
**細野 豊樹 教授**

1994年東京大学大学院法学政治学研究科修了。公共政策学修  
士(MPP)、法学修士。研究分野は政治学、アメリカ研究、環境学  
など。環境庁での行政経験と専門知識を生かしながら、アメリカ  
合衆国の環境政策や地球環境問題について、研究・分析を続け  
ている。またインターネットなど、情報技術が政治に与える影響  
についても研究。最近の主な業績に「気候変動の科学をめぐる政  
治 アメリカと国際機関における政策論議のモデル化」<sup>1)</sup>「ア  
メリカ現代政治の構図」<sup>2)</sup>「オバマ政治を採点する」<sup>3)</sup>などがある。

主な担当科目  
環境・科学の諸課題、政治分析の基礎、アメリカ文化論、  
地球環境論 ほか



政策の基礎データを提供する監視測定

環境政策は、環境の状況の把握から始まる。大気や水の汚染、  
騒音などを、自治体などが常時監視測定し、それが政策の基礎  
データとなる。授業では、操作が簡単な騒音計を使って、例え  
ば大きな声は何デシベルか、などを実感してもらっている。

## 環境問題についての知識を体系的に伝え、判断の基準を養う 自分が住む街の環境を調べ、参加型の意識を育む

**Education policy** 環境リテラシーの意義、争点につき判断する市民としての教養

3.11以降、日本における環境・エネルギー政策  
は曲がり角にきています。こうした中で、市民か  
らの政策へのインプットが、今までになく重要で  
す。真の「政治主導」とは、官僚任せが政治家任  
せになることではありません。市民の声が、政治  
と行政を動かすことなのです。

政治主導が強くなっていくと、市民の環境リテ  
ラシーがますます大事になります。地球温暖化

対策にしても、原子力の安全にしても、賛否両論  
のさまざまな意見が飛び交います。このため、だ  
れが言っていることを信用できるかを、市民が判  
断する教養が求められるのです。

共立女子大学では、こうした要請に対応すべ  
く、理科系と文科系の専門家が、学問の専門性、  
体系性を保ちながら、わかりやすい環境教育に注  
力しています。

**Main class** 身近な環境問題から入って、知識を広め掘り下げ、自分の考えを持つ

「環境・科学の諸課題」は、政治が専門の私のほ  
か、生活科学・環境科学の芳住先生、地球物理学  
の杉先生、食品科学・応用微生物学の田中先生の  
4人の専任教員が「環境と科学」をテーマに、4ク  
ラスを設けているのが特徴です。私の授業は、典  
型7公害(大気汚染、水質汚濁、騒音、振動、悪臭、  
地盤沈下、土壌汚染)について体系的にわかりや  
すく講義する入門課目の位置付けとなっています。  
教養教育科目は、3・4年次生も受講対象な  
ので、わかりやすさだけでなく、レベルが高い内  
容を盛り込むことにもこだわっています。

今年は、福島第一原子力発電所事故による放  
射能の健康影響についてもフォーカスしていま  
すが、放射能は専門家の意見が分かれる難しい  
問題です。授業では学生にさまざまな論点から  
の記事を配り、判断の難しさを伝えていきます。ま  
た、問題意識、参加意識を高める観点から、自分  
たちが住む街の環境について調べて書くレポート  
を、毎年課しています。さらに、今年は若者の  
目線での新聞などへの投書や、課題とすること  
を試みました。

## 自分たちが日々、暮らしている“環境”を意識させることで、社会の仕組みへの興味と自主的な行動力を養う

### Education policy 街の話題、ファッションへの興味から「環境への気づき」を育む

生活科学科では、生活に関する実践的な知識・技能の習得を養成目的の一つにしています。私たちに身近な衣服、生活道具や空間は、とりまく環境とともに変化するという視点から、歴史や風土、経済や世界情勢といった社会環境が生活に影響を与えることを、まず理解してもらいます。同時に、演習や学外授業を通じて、地球や自然環境

といった大上段の環境だけが対処すべき問題なのではなく、日々の生活や人々の装い、街や地域などの、より身近な環境について考察する必要性を教えます。ライフスタイルを変えることで解決できること、またその可能性を、学生一人ひとりが自発的に考え、行動できる主体になってほしいと考えています。

### Main class 流行に流されないために流行を知る。環境とは何かも自分で考えていく

「生活デザイン演習」では、彼女たちに身近なスタジオジブリのアニメを題材に、環境を考える授業を進めています。『もののけ姫』では、人間が生み出した科学技術が森林や動物を消滅させてしまうという、自然と人間の相克がテーマになっていますが、娯楽として見てきたアニメの中で、実は語られていた自然破壊の現実を、自分たちはどう受け止めていくべきなのか。彼女たちの興味や感じたことの視点に立って授業を進めます。

教養教育科目の「デザインの現在」では、近代化とデザイン様式の変容を扱いますが、消費者と

して、時には生産者として活動する私たちが、現代社会の根底にあるデザインと消費の関係を考えるにあたって、ファストファッションと流行の問題や、「あなたのTシャツはどこから来たのか」といったグローバル社会を扱ったものを題材にします。

また、物理学者として著名なエイモリー・ロビンズの『分散型エネルギー社会』なども紹介し、直面しているエネルギー問題を中心に、環境デザインの重要性について考察を進めています。



短期大学  
生活科学科

渡辺 明日香 准教授

1996年共立女子大学大学院家政学専攻修士修了。専門は現代ファッション・色彩・生活デザインであり、若者文化・ファッションやデザインをめぐるコミュニケーション・情報メディアとのかわりなどを研究している。また、1994年より実施しているストリートファッションの定点観測をもとに、人々や街をとりまく環境の変化を実証的に捉えている。主な著書に「ストリートファッション論」色のしくみなどがある。

主な担当科目

ファッション・デザイン論、生活デザイン演習、色彩学 ほか



学生が親しみやすいDVD、テキスト

デザインする側や消費する側でなく、生産する側に焦点を当てたドキュメンタリー『女工哀歌』は、学生たちにリアルに響いている。また、カラー&デザイン研究室で公開している「ストリートファッションレポート」は界隈からも注目されている。<http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/nyusi/street/index.htm>

## 社会でますます重要になっていく環境意識を、グローバルとリーガルを基準に読み解き、現在進行形の問題について考察する

### Education policy 異なる文化を乗り越え、共通合意となった判断基準を学ぶ

私たちが環境問題について考えるとき、自分と自分のまわりから始めるのはもちろんですが、他者とのかわりに関するリーガル・マインド、そして世界がつながっているというグローバル意識が大変重要なキーワードになります。環境保護と経済成長を両立させ、現在の世代のみならず、後の世代の発展も持続可能にしようとする国際環境法を学びます。国家間の合意である条約が、いかにして成立したのかを考えることは、その底流を流れる法原則を知ることになります。社会に羽ばたく学生の皆さんとますます重要になる環境意識を育んでいきます。

最初に学び、国際法の一分野として環境法があるのかを考察し、国際環境法がどのように発展してきたかを学んでいきます。成立背景、成立形式、義務の特徴、管理責任などについて、それぞれ専門的に考察し、また実際にあった事件、国際判例などを題材にして、より深く検討していきます。

### Main class 私たちが成し遂げてきた成果を学び、次の時代への強い意志を理解する

「国際社会特論III(国際協力)」の授業は、予防原則やサステナビリティなど種々の法原則に基づく環境や国際法を学ぶ授業です。環境保護は当然と感じている方が多いと思われそうですが、現実社会においては、私人の財産権の保護という法益も存在します。また、途上国には発展という課題もあります。環境保護を行うため、対立する法律上の利益をどのような形で妥協させてきたのでしょうか。この講義においては環境保護を国際法上の視点から捉えて考えていきます。具体的には、国際環境法が対象とする環境とは何かを

最初に学び、国際法の一分野として環境法があるのかを考察し、国際環境法がどのように発展してきたかを学んでいきます。成立背景、成立形式、義務の特徴、管理責任などについて、それぞれ専門的に考察し、また実際にあった事件、国際判例などを題材にして、より深く検討していきます。

その他にも、「南北対立を緩和する概念」「環境保護と自由貿易は矛盾しないのか」「武力紛争という特殊な状況下で環境保護は可能か」など、今日的な問題も取り上げ、現在進行形の環境問題について取り組んでいます。



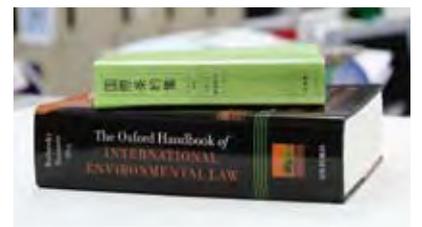
国際学部  
国際学科

立松 美也子 教授

1995年上智大学大学院法律学専攻満期退学。専門は国家を主たる規律対象とする国際法。その中でも、とくに国家間構造の中で、いかに個人の保護を行うかをテーマとして国際人権法や外交的保護について研究を進めている。論文に「人権の普遍的保障」「人の移動、難民」「感染症」(以上、『地球的課題と法』所収)、「公害」(『ヨーロッパ人権裁判所の判例』所収)などがある。

主な担当科目

法学概論、国際法I、国際組織論、国際社会特論(国際協力) ほか



授業で使用するテキスト類

『国際条約集』は環境条約すべてを網羅してはいませんが、度々利用することになる。授業終了時にはポロポロになってしまいうことも。事例によっては日本語の翻訳がない。自ら翻訳することは背景を読み解くためにも必須のプロセスだ。



家政学部  
建築・デザイン学科  
松本 年史 教授

1977年、東京芸術大学大学院美術研究科建築理論専攻修了。博士(国際文化)、芸術学修士、一級建築士、構造設計一級建築士。大学院修了後、木村俊彦構造設計事務所に入社、建築家とのコラボレーションで多数の建築設計に携わる。1988年、松本構造設計室を設立。1999年より2011年まで東北芸術工科大学デザイン工学部建築・環境デザイン学科教授。2011年より共立女子大学家政学部建築・デザイン学科教授。

主な担当科目  
構造力学、構造計画、構造設計、建築材料 ほか



月山志津温泉「雪旅籠の灯り」ワークショップ

雪の旅籠を作って、昔の月山志津温泉の町並みを再現するイベント。他の雪まつりでは雪を積み上げて作るのに対し、自然に積もった雪を掘り込んで建物を造っているのが特徴。雪は溶けて水となり、周りの木々や作物の成長を助ける究極のエコ材料。地域の特性を生かした活気あるイベントとして、第13回「ふるさとイベント大賞」で最高賞「総務大臣表彰」を受賞した。

## 資源やエネルギーの使用や廃棄物を減らし、環境再生を最優先する「持続可能な社会」に求められる建築と構造を考える

### Education policy 持続可能な社会に求められる大学教育

「持続可能な社会」に求められる条件は、「生活の質の向上、環境への影響の削減、公平性の実現」の3つであると考えます。この問題に対する最近の社会の取り組みを見ると、「環境への影響の削減」が主要テーマとなっていることが多いと感じますが、3つの条件がバランス良く充足されて初めて「持続可能な社会」が達成されるのではないかと思います。

家政学部は、この3つの条件の「生活の質の向上」に深く係わる「衣・食・住」環境分野の学科で構成されており、これからの持続可能な社会を達成するために重要な役割が期待される学部であると考えます。建築・デザイン学科は、「住環境の向上」に係わる問題を、建築とデザインを通して解決していくために必要な知識を身につけ、社会で実践していくための応用力を養う教育を行っています。

### Main class 持続可能な社会に求められる建築教育

高度成長の時代の中で、日本の建築は高品質な材料と高度な建設技術によって、大きく発展してきました。しかし、高い経済成長と引き替えに、解決しなければならない環境問題や社会問題が生じています。

環境問題では、地球温暖化への対策として二酸化炭素排出量の削減が求められています。日本は世界第4位の二酸化炭素排出国であり、その1/3は建築関連のものであるといわれています。建築分野での二酸化炭素の排出を含めた環境負荷の削減は、持続可能な社会達成にとって不可欠な課題であると考えます。私の専門である建築の構造設計

の分野でも、鉄とコンクリートとガラスに代表される工業生産された材料は、建築の可能性を拡大してきましたが、同時に環境負荷も増大させることになりました。持続可能な社会に求められる建築を考える時、これまでのスクラップアンドビルドの建築スタイルを見直し、木や土といった自然素材の活用を考える教育が求められていると考えます。また地域性に目を向けることも大切で、その体験的教育の場として、積もった雪を利用して旅籠をつくる「雪旅籠の灯り」ワークショップを山形の月山志津温泉で地元の方々や学生たちと一緒にしています。



短期大学  
生活科学科  
岡田 悟 教授

1983年東北大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程満期退学。専門は近世住宅史。人の生活の容れ物である住宅からは、生活をとりまくインテリア空間や建築空間を通じて、多くのことを学ぶことができる。現在よりも科学や技術が未熟であった時代には、人は周囲の環境に敏感で、環境と上手に付き合いつながりながら生きてきた。現在においてもこうした知恵を活かした空間づくりに取り組んでいる。

主な担当科目  
インテリア設計演習、インテリアCAD基礎演習 ほか



手描きとCADを使用した授業

手描きとコンピュータを使ったCAD(コンピュータ支援設計)とは、車の両輪のような関係であり、両方を共に学習するのが生活科学科の伝統。また、テキスト類は「住まいとインテリアデザイン」「建築設計資料集」といった基礎的な知識やデータが載せられたものを用い、授業ではその応用力を高める方針である。

## 日々の暮らしを支えるインテリア空間こそ“環境”そのものであるという認識に基づいて、自分とその周囲を検討、考察する

### Education policy 異なる価値観のぶつかり合いが新たな地平を生み出す

生活科学は生活者の学問であり、生活者は生産者と消費者の両方の性格を共に持つものです。つまり、生産者はしてあげる側の、消費者はしてもらおう側の人間といえます。今まで学生諸君はしてもらおうが多かったと思いますが、今後はしてあげることができれば社会で信頼や収入を得られませんか。

学生時代はしてあげる人になる準備期間といえ、してあげる価値観を獲得する時期です。高校までとは異なる教育の中で、どのような価値観を発見すること

が出来るでしょうか？

環境の問題に限らず、従来思い描いていたイメージとは異なることを授業で聞いたりすることと思います。さらに、何を言っているのかさっぱり分からない先生がいればラッキー。自分とはかけ離れた価値観を持っているが故に分らないのであって、つまりは、自分にはない価値観の宝庫なのです。異なる価値観をぶつかり合わせ、大いに混乱して新たな地平が開けるのです。

### Main class 環境を空間という形で設計し、表現する孤独で厳しい作業に挑む

学生に「インテリアって何のこと？」と尋ねると「家具のこと」「カーペットやカーテンのこと」「壁飾りや置物のこと」などの答が返ってきます。いずれも間違いではありませんが不十分です。一方、「インテリアの反対語は？」と尋ねると答えられる学生は少数です。正解はエクステリア。門扉やフェンスを指します。

インテリアの領域が文字通り家具から置物までの「内部の」即ち「室内の」ことがらを扱うという時代は過ぎ去り、今は人が発生させる空間を扱うという考えが主流です。扉まわりは人が開けて通って閉めるという

点で人が発生させる空間であり、建物内であっても屋外であっても間違いなくインテリアの要素です。

こうした新しい概念に立てば「インテリア設計演習」「インテリアCAD基礎演習」はまさに環境を空間という形で設計し、表現することに他なりません。同時に、設計や表現については、その意味は教えられますが、設計案、表現作品の作り方のハウツーはありません。従って、各自が知恵を絞り出して作り上げる他はなく、挑戦的で厳しい作業であることを肝に銘じておく必要があります。

## 地球環境問題を正しく理解し、 循環型社会をめざす持続可能なシステムを構築する方策を探る

Education policy 地球や地球上の他の生物たちと共存し共進化することをめざす

地球の環境は数多くの幸運が重なって創り出されたものですが、人間活動の増大が地球規模の環境問題を引き起こしました。これに関連して、枯渇する資源問題・爆発的に増加する人口問題・大規模になり複雑化してきた自然災害なども、早急に改善策を講じなければ、人間だけでなく他の生物の生命をも危うくする状況にあります。環境問題については1970年代以降、多くの国際会議が開かれ様々な

条約や宣言が採択されてきましたが、まずは問題の本質を正しく認識して、共通の理解を得ることが出発点になります。その上で、今後も地球や地球上の他の生物たちと共存し共進化を続けるために、そして安全で安心な人生を全うするために私たちは何をなすべきか。この点を今、学生の皆さんに真剣に考えて欲しいと願っています。

Main class 地球環境問題・資源問題・自然災害について、学び、自ら考える

教養教育科目の「環境・科学の諸課題」を1クラス担当しています。そこでは最初に地球と生命の誕生以来の歴史と現状を概説し、続いて地球環境問題について原因・影響・対策と問題どうしの相互関係を中心に講義を進めながら、深刻化したエネルギーなどの資源問題や近年になって姿を変えつつある自然災害について解説してきました。2011年度は、東日本大震災の原因となった巨大地震・巨大津波と原子力発電所の事故が提起した放射能の問題を詳しく扱い、災害への備えや発災時の対応なども検討しました。また、学生たちが各テーマを正しく理

解して自ら考える力を養うために、私が担当する科目では「数学」「物理学」「統計学」などの知識や考え方が重要であることを伝えています。授業では、テキスト・配布資料・ビデオを使って、理解と関心を高めるように工夫しています。

家政学部では、学部共通科目として「環境学概論」を新設しました。2年次の科目なので2013年度からの開講ですが、様々な講義や実習科目を通じて環境学習に取り組んでいる学生たちが、それぞれの専門分野に深く関わる環境課題に適切に対処できる実力を身に付けることをめざします。



家政学部  
建築・デザイン学科  
杉 憲子 教授

1976年東京大学大学院理学系研究科地球物理学専門課程修士、理学博士。専門分野は固体地球物理学で、海洋プレートが沈み込む地域のテクトニクスと地震のメカニズムについて研究を行ってきた。1995年の阪神淡路大震災以後は自然災害を、また21世紀を迎えてからは環境科学を研究テーマに加えた。更にここ5年位は、科学の教育と普及にも力を注いでいる。著書に『新版地学事典』など、論文に「海洋プレートの一生」「自然災害に対する意識調査」などがある。

主な担当科目  
環境・科学の諸課題、数学、統計学、基礎物理学 ほか



テキスト・ビデオ教材と放射線量・UV強度測定器

「環境・科学の諸課題」では、理解を助けるためにテキストを指定し、理解を深めるためにビデオを利用している。また、環境データを身近に感じするために、放射線量測定器と紫外線強度計を紹介する予定である。

## 現代の日本社会の緊急の課題となった環境問題を、 比較文化の視点からとらえる

Education policy 日仏比較の視点から、フランスと日本の社会への理解を深める

2011年3月11日の東日本大震災以降、日本社会の様相は一変しました。それまで潜在していた格差などの社会問題、環境問題、とくに原子力をめぐる安全神話の欺瞞などが一度に表面化し、大きな困難に直面しています。この状況を乗り越えるためにどのように行動すべきなのか、私たちの一人ひとり重い責任を負っています。

フランスは、国民統合や市民の連帯のあり方が日本と大きく異なっています。国民が血統によって定

義されず、市民社会への参加の意思と深くかかわっていること。個人主義でありながら市民の連帯が強いこと。フランスの社会を知ること、日本社会で当然とされる価値観が揺さぶられる面白さがあります。古くから言われていることですが、外国の社会、文化を学ぶということは、日本への理解をより深いものにします。加えて私たちがどのように行動すべきかを考えるきっかけになるでしょう。

Main class 文化と科学の視点で考えるエネルギー政策

福島第一原子力発電所事故により、原子力安全政策は見直しを迫られています。将来のエネルギー政策を考えるには、外国の事例研究が欠かせません。2012年度「国際文化特論」(3・4年生対象)では「文化と科学の視点で考える3・11大震災以降の原子力安全」というテーマで、学部の地域研究のスタッフが参加し、他学部や学外からの講師もお招きし、地域文化、社会および自然科学の専門家のコラボレーションによる講義をオムニバス形式で行います。

自然科学の視点からは、原子力発電の基本原理

について、そして、日本の地震と原子力安全についてお話しできます。また、諸外国の事例研究として、文芸学部のジャンニク・マーニュ先生にはフランスの脱原発の動きについて、さらに本学部の講師を中心にドイツ、フランス、イタリア、中国、アメリカの文化とエネルギー・原子力政策について考えます。

学生たちは、諸外国の事例、また日本の現状をもとに、環境問題についての倫理的側面も踏まえた日本の将来について考えることになるでしょう。



国際学部  
国際学科  
辻山 ゆき子 准教授

1988年お茶の水女子大学大学院修士課程人文科学研究科修士、文学修士。1991年フランス・ポルドー第二大学博士課程社会学DEA留学。研究分野はフランス地域研究。フランスの移民出身者・マイノリティの社会統合について研究を進めている。マイノリティが文化的な活動によって社会統合を目指す動きに関心がある。日本社会学会、日仏女性研究会などに所属。最近の主な業績に「在仏日植民地アルジェリア出身の女性のアイデンティティ - 在日コリアン女性との比較」(『共立国際研究』所収)などがある。

主な担当科目  
国際文化特論「文化と科学の視点で考える3・11大震災以降の原子力安全」ヨーロッパ文化論(ヨーロッパの社会1)ヨーロッパ地域論(フランス)、応用フランス語 ほか



基本的文献と比較文化の視点からの授業

エネルギー問題について、様々なテキストを紹介しながら講義を進める。基本的な文献を取り上げる一方で、比較文化の視点からも新しい将来のエネルギー政策のあり方を考えていく。

## NEWS

共立アカデミー 2012年度開講講座のご紹介

🌿 一緒に日本の風景を再発見してみませんか？

### 日本の風景を読む ~もうひとつの日本史~



Navigator 山森 芳郎

共立女子学園名誉教授。  
工学博士。建築学専攻。主な著書に、『日本の馬と人の生活誌』(編著)、『イギリスの田園生活誌』(共訳)、『生活科学論の20世紀』、『キーワードで読むイギリスの田園風景』、『夢の住まい』、『夢に出てくる住まい』など。

日本人とは何者が それを読み解くのに、田園風景の存在を無視できません。なぜなら、そこは、私たち現代人が無意識のうちに受け継いでいる、自然観や社会的な規範意識形成の揺籃だったからです。海岸線から内陸部、山岳部にわかって、美しい田園風景のスライドを見ながら、政治権力の興亡を基軸とした、これまでの歴史学とはちがう もう一つの日本史 を発掘していきます。歴史がわかれば現代がわかります。一緒に忘れていた風景発見の旅に出てみませんか。それは、自分発見の旅でもあるのです。

定員 20名

日程 全6回 水曜日13:20~14:50

- 5/9 「白砂青松」
- 5/23 「地図にない湖」
- 6/6 「条里制の謎」
- 6/20 「扇状地の散居集落」
- 7/4 「武蔵野の風景」
- 7/18 「なぜ、そこに山があるのか」

#### お問い合わせ窓口

〒101-0003 千代田区一ツ橋2-6-1

学生課 共立アカデミー

TEL.03-3512-9981



本学の環境に関する授業の一部をホームページでご覧いただけます。  
<http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/outline/kankyo/>

共立女子大学・共立女子短期大学 環境学習への取り組み 2012

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋2-2-1 <http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/>

編集：学生課 監修：国際学部 細野豊樹(教授) 生活科学科 三井直樹(准教授)

